課題 4 空間レポート

いい空間を知らない（体験したことのない）人にいい空間はつくれません。
たくさんの空間を体験し、その中からみなさんが「いい」と思う空間を選んで、
レポートしてください。実際に見てきたからこそ気づいた視点やおもしろさを
第三者が理解できるように、ビジュアル（パネル）とスピーチ（3分）で
「どのようにいいのか」をプレゼンテーションすることが課題です。

〈製作するもの〉
A0サイズ（1,189×841㎜）にレイアウトしたパネル1枚＋3分間のオーラルプレゼンテーション（口頭発表）
※理科大の授業では、この課題は「4人1組になってグループワークをする」「全員がプレゼンテーションを体験する」というふたつのトレーニングをかねています。友だち数人の前でもいいので、「短い時間でビジュアルを用いて発表する」という体験をしてみるといいでしょう。

〈用意するもの〉
カメラ／スケッチブック／コンベックス／歩きやすい靴／ハレパネ／できればノートパソコンなど

〈製作期間〉
60日程度

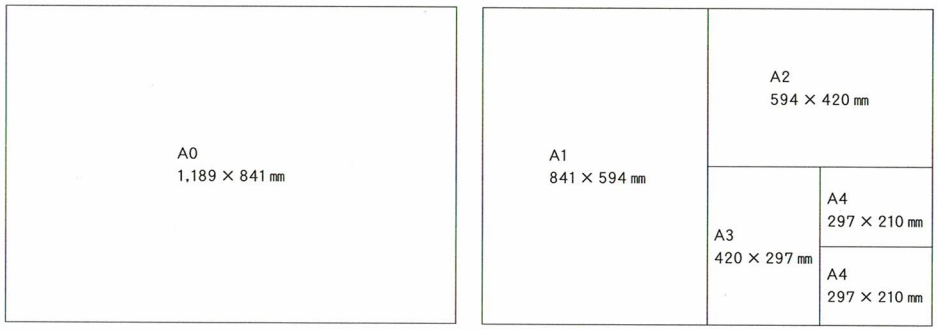
進め方

❶建築マップなどを参考にして、10カ所の建築や空間を見学に行きましょう。その際は「建築見学の心得」（50頁）を必ず守ってください。

❷おもしろかった建築については、建築雑誌などで基礎情報を入手しましょう。建築名・設計者・完成年・場所・用途・図面（雑誌に掲載されているもの）は必須で、さらに設計者によるコンセプト文や、第三者による解説文なども集めましょう。ただしこれらの情報は自分が建築を理解するために集めるのであって、これらを編集してレポートをつくっても意味がありません。

❸何回も足を運んで「どこがいいか」を仲間や先生と議論し、「いい」を共有しましょう。ただ「いい」ではなく、空間の状態を表現する言葉を見つけることがポイントです。

❹よさを伝えるために必要な写真やイラストなどを用意して、ビジュアルなパネルを作製しましょう。これはレイアウトの訓練でもあります。見やすくてかっこよく、伝わりやすいレイアウトを目指しましょう。

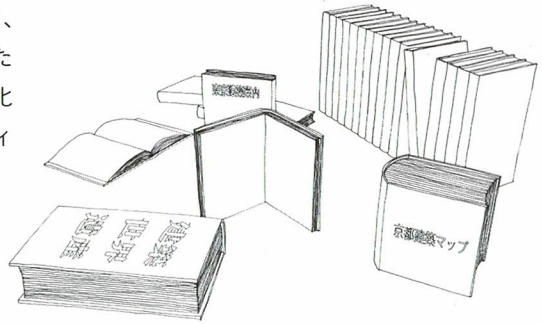


A判の紙の規格寸法

❺プレゼンテーションは3分間です。原稿をつくり、練習をしましょう。友だちと集まって時間を計りながら、お互いにプレゼンテーションしてください（60頁「TOPIC：オーラルプレゼンテーションの極意」参照）。

ヒント

・このレポートは「建築紹介」ではありません。すべてを説明する必要はありません。
・いいと思った空間にはできるだけ長い時間滞在して、周囲を観察してください。
・「いい」空間を生み出しているものが何なのかを発見していくと、説明ができるようになります。たとえば「光が美しく、さらに変化がある」「緊張感のある細部のディテール」「思いがけない素材の使い方」「まちとのかかわり方」など。
・行ったことのない人に空間の様子を伝える手法として、歩きながら撮影する連続写真や一定時間ごとに同じ場所を撮影する定点写真などは効果があります。



クリエイティビティが
あるものの見方をしよう

どうしたら考えていることのエッセンスが人に伝わるか、そういうコミュニケーション能力は、建築家になるためにはすごく大切です。この「空間レポート」の課題は、そのエクササイズだと思ってください。多くの建築はできあがったあとにはアマチュアの人びとが利用しますから、そのときに必要なメッセージのキャッチボールの練習になるはずです。

ここでは、まずレポートに値するものをさがし出してもらいます。最初は10の建築作品。建築作品といっても、設計者の名前のわかる近代の作品だけじゃなくて、近代以前のものがあってもかまいません。あるいは、難しいので推奨はしませんが、素晴らしい庭園なんかが入ってもかまわない。

これがいいんじゃないかと思ったら、建築雑誌のバックナンバーを調べましょう。建築作品は一部の例外を除いて、作品集より雑誌に発表されたときに一番密度の高い情報があります。同じ作品でも、違うメディアでは違ったスポットライトが当てられます。日本のAとBという雑誌と海外のCという雑誌で、その作品がどういうふうに紹介されてきたのかを調べます。それに対して、「いやいや違う。なんでこういうふうに見ないんだ」という視点からレポートしてみるのもいいでしょう。

最終的にノミネートした候補に対しては、いろんな天気の日や時間に、何度も何度も足を運んでみてください。3回くらい行ったらつまらなくなるようなものをターゲットにしても、全然意味がありません。それに、人間はその人が意識化できている以上のものはなかなか見えません。逆に言えば、意識することによって見えてくるものの深さや広がりが変わってきます。初めはなんだかよくわからないと思っていたのに、何度も行っているうちに気づきがいっぱい発生したら、この課題をやったかいがあるというものです。

この「空間レポート」では、通り一遍にその建築作品を要約しても仕方がない。

そうじゃなくて、「この建築ってそういうことだったのか」と、みんなが思うような何かを見出すことが求められています。そういうクリエイティビティがあるものの見方ができることはすごく大事だし、『空間練習帳』をやったけど建築家にはならなかった人にとっても、あとでこの課題はすごく生きてくると思います。

伝えたいことが固まったら、それをA0のパネルに表現して、まわりの友だちにプレゼンテーションしてみましょう。あなたが発見だと思っていたことが、実際に伝わるかどうかも重要です。たとえうまく伝わらなくても、そこでギャップを感じることが、建築家としてのコミュニケーションのトレーニングの第一歩なのです。

TOPIC

エスキスの進め方

この『空間練習帳』は、課題を進めながら自分ひとりで空間のトレーニングができる本になっていますが、大学などの学校の課題では、指導してくれる先生と対話しながら自分の案を練っていくことがほとんどです。これをエスキスと言います。エスキスを空回りさせないためにはいくつかの極意があります。

まず、対話はビジュアルに行うこと。エスキスは悩み相談室ではないので、その場でいっぱいしゃべられても、案は少しも進みません。頭に浮かんだことを他人が見てもわかるように、ビジュアライズする。模型でもいい、スケッチでもいい、完成度の高さは必要じゃありません。自分の興味を視覚的に相手に伝えられれば、先生は的確で具体的なアドバイスを返してきます。これが建築家同士の会話です。

そして、エスキスのアイデアはたくさん考える。最初からひとつに絞るのではなく、いろんな可能性をさぐってください。エスキスを繰り返すうちにひとつの方向に案が収斂し、より具体的になります。おっくうがらずどんどん手を動かすことが、いい最終案への近道です。

最後に、人のエスキスも見て聞くこと。同じテーマでも、ほかの人がやるとこんなにも発想が違うのかと思うはずです。その発想の広がりを実感できるのは、学校というところのすごくいい点なのです。

TOPIC オーラルプレゼンテーションの極意

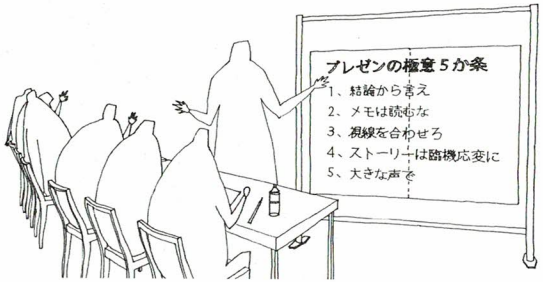
建築家という職業は、ほかの人に共感してもらえないと仕事を始められません。そのためには、案をつくって、相手にそれを見せて、その人たちの前で、この案がどんなに素晴らしいかということを言わなくてはいけません。

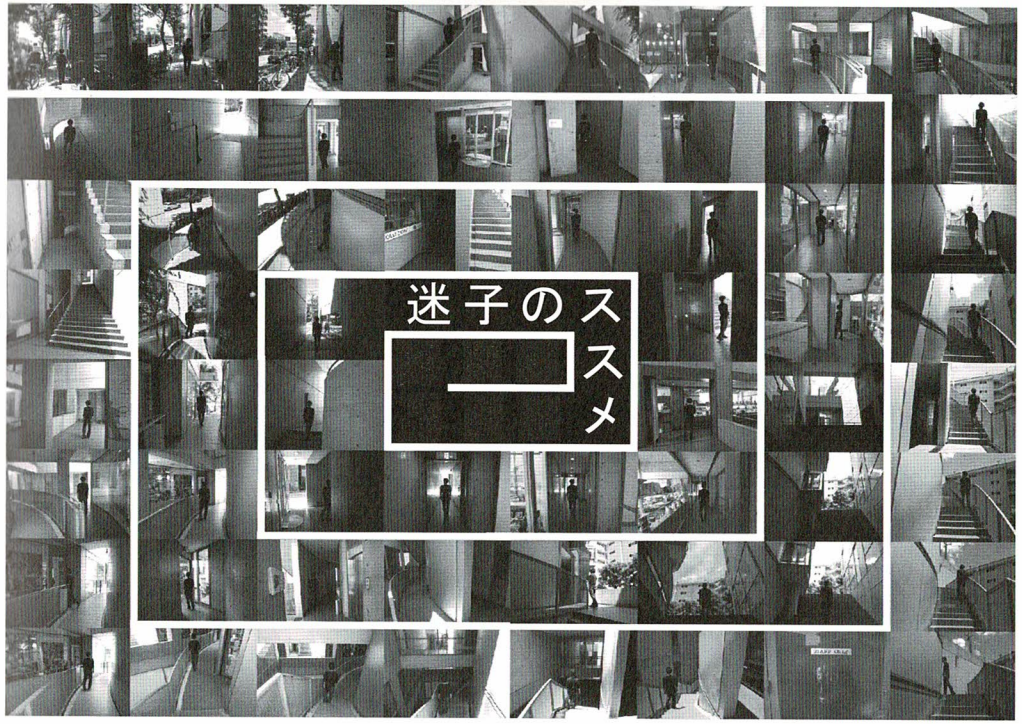
そのときのポイントはいくつかありますが、具体的にやることは極めて簡単です。ひとつ目は、結論から言う。ふたつ目は、メモを読まない。3つ目は、その場にいる全員と視線を合わせる。4つ目は、相手の目を見てストーリーを臨機応変に変える。最後に、声が大きいを5つ目にしてもいい。

臨機応変に、といきなり言われても無理ですけど、とにかくまず結論から言う。これはみなさんにもすぐにできます。説明的な情報を短い時間の中でしゃべり始めても仕方がありません。伝えたいことの一番のエッセンスから始めてください。建築家という人種は、幕の内弁当で一番好きなものから食べる人じゃないと向いていないと言われています。プレゼンテーションでも、一番おいしいところをまず見せる。するとほかもおいしいんじゃないかと、みんなが期待して身を乗り出してきます。これが聞き手の反応で、お互いのコミュニケーションが重要なのです。

いったんそういうふうに話し方を考えると、一番言いたいことが一番大きくプレゼンテーションのパネルや映像に表れてくるといった具合に、ビジュアルのつくり方も変わってきます。だから、しゃべり方を考えながらつくっている人のプレゼンボードは、ビジュアルも編集されて鍛えられています。

もうひとつ、オーラルプレゼンテーション（口頭発表）では実際に声に出して練習することが大事です。できたら誰かに聞いてもらって、わかりやすかったか、感動したかどうかを確認してみましょう。このトレーニングをしておけば、きっとプロポーズするときだって有効なはずです。





学生による「空間レポート」（上：安藤忠雄「COLLEZIONE」1989年。下左：坂茂「ニコラス・G・ハイエックセンター」2007年。下右：香山壽夫「彩の国 さいたま芸術劇場」1996年）

課題 3 フォトコンテスト

優れた建築空間をあなたの視点で撮影し、
人の心に何かを伝えてください。写真家の作品では
タイトルにより相乗効果を生むものもありますが、
ここでは文字による補足は一切禁止です。

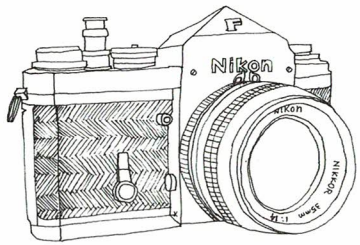
〈製作するもの〉
ワイド4つ切りサイズ(254×368mm)にプリントした写真1枚　※プリンターで出力するのではなく、必ず写真店で焼いてもらうこと。なぜか？ は、一度やってみればわかります。

〈用意するもの〉
カメラ（デジタルでも可）／できれば三脚など

〈製作期間〉
一生

対象とする建築(推奨)

横浜港大さん橋国際客船ターミナル(foa、2002、神奈川県)
せんだいメディアテーク（伊東豊雄、2000、宮城県）
金沢21世紀美術館（妹島和世＋西沢立衛、2004、石川県）
鬼石多目的ホール（妹島和世、2005、群馬県）
モエレ沼公園（イサム・ノグチほか、2005、北海道）
瞑想の森　各務原市営斎場(伊東豊雄、2006、岐阜県)
牧野富太郎記念館(内藤廣、1999、高知県)
ハラミュージアムアーク（磯崎新、1988、群馬県）
海の博物館(内藤廣、1992、三重県)
群馬県立近代美術館（磯崎新、1974、群馬県）
丸亀市猪熊弦一郎現代美術館（谷口吉生、1991、香川県）
日本盲導犬総合センター（千葉学、2006、静岡県）
ヒルサイドテラス（槇文彦、1969～98、東京都）
光の教会(安藤忠雄、1989、大阪府)



※美術館の内部などは撮影禁止のところも多いので、注意すること。

伝えたいことをワンショットで示せ！

この課題では実際に建っている建築を写真に撮ってもらいます。文字や説明が一切ない1枚の写真だけで、人の共感をどのくらい得ることができるかを試してみましょう。共感を得るというのは、あなたがそこに行って、立って、体験したエッセンスのようなものを、そこに行ったこともない、あるいは行ったことはあるけれどそんなことに気づいていない人に、写真を通してどれくらい伝えられるかということです。どんなことに感銘を受けるのかはケース・バイ・ケースですが、『空間練習帳』ですから空間的な何かをテーマにしてください。

この課題にかぎらず何かの空間体験をしたら、その中でのベストの1枚はどこかをいつも考えながら見ると、建築を見る眼が鍛えられます。そういう意味でこの課題のもうひとつの大きなねらいは、みなさんの空間を見きわめる力、眼力を鍛えることです。

理科大の授業では、ザエラ・ポロとファーシッド・ムサヴィが設計した「横浜港大さん橋国際客船ターミナル」(2002年)を撮影の対象にしています。この建築は、自然の地形のようにうねった屋上が広場として開放されているので、公園のようでもあり、ランドスケープのようにも見える、かなりユニークな事例です。ここでは百数十人の学生たちが同じ日に撮影しても、おもしろいことにまったく違う写真が撮れます。どの写真が正しいという話では全然ありません。カメラという機械を通して、そこで一番に伝えたいことをどうやってうまくすくい取るかが重要なのです。

幸いなことに、いまの日本には撮影するに値する素晴らしい空間がほかにもたくさんあります。前頁にもいくつか事例を挙げていますが、それらに限定する必要はありません。みなさん自身でもっと発見して、さまざまな建築でトライしてみましょう。

TOPIC

建築見学の心得

〈感謝する！〉

見学している建築物の所有者や利用者、そして、その近隣の方々への配慮を忘れないようにしましょう。見学していると、ついつい夢中になって、あたりかまわず写真を撮ってしまったり、近隣の建物の階段に勝手に上って遠景を見たり、大きな声で話をしてしまったり……。建築を快く利用している人びとに大きな不快感を与えることは避け、見学できることに感謝の気持ちをもってください。逆の立場だったら、ということを常に考えて行動しましょう。もし所有者や利用者の方と話ができるのであれば、貴重な機会なので話をしてみると、また違った視点が見えてくるかもしれません。

〈確認する！〉

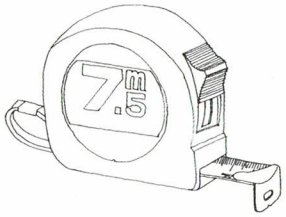
見学の際、入ってはいけないところ、写真を撮ってよいところ、だめなところ、その他の注意事項をきちんと確認しましょう。また、見学時の写真をブログなどのインターネット上で公開してもよいかどうかも確認しましょう。

〈気になったら立ち止まる！〉

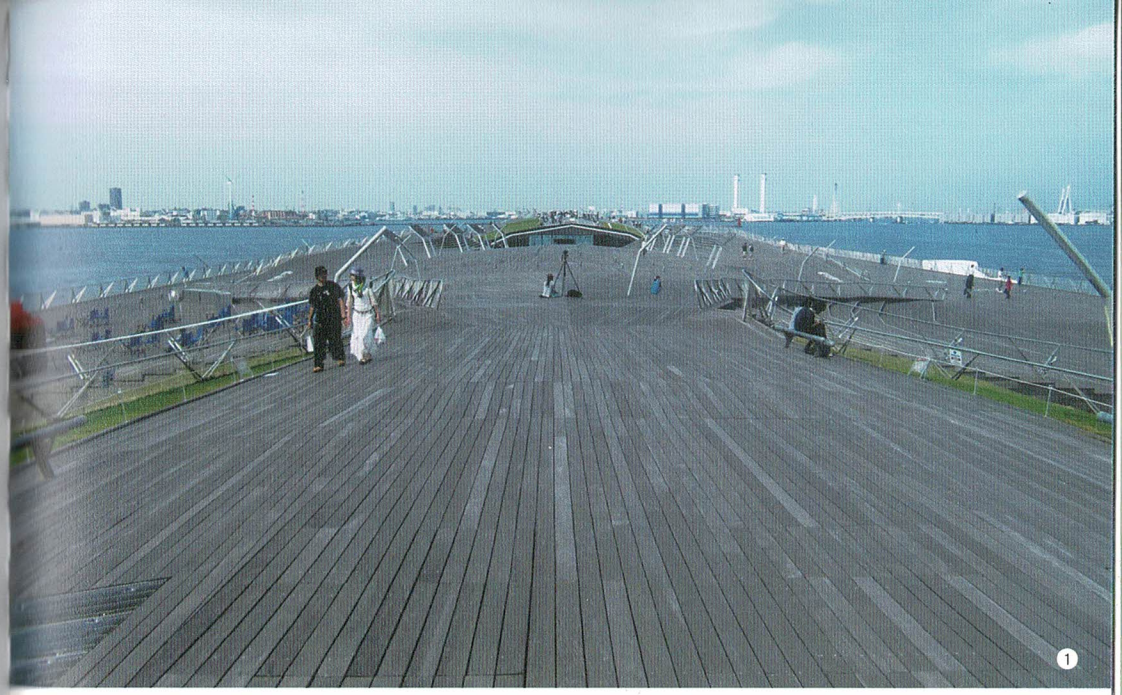
同じ速度でうろうろとするだけでなく、気になった空間や場所やものに遭遇したら少し立ち止まってみましょう。しゃがんでみたり、耳をすましてみたり、ぼーっとしてみたり、視線の高さを変えてみたり……、五感で体感する時間をもてることは、写真では味わえない、見学ならではの貴重な経験です。

〈測る！〉

気になる寸法はぜひ測ってみましょう。寸法という数字で体験を押さえておくことで、貴重な資料となります。

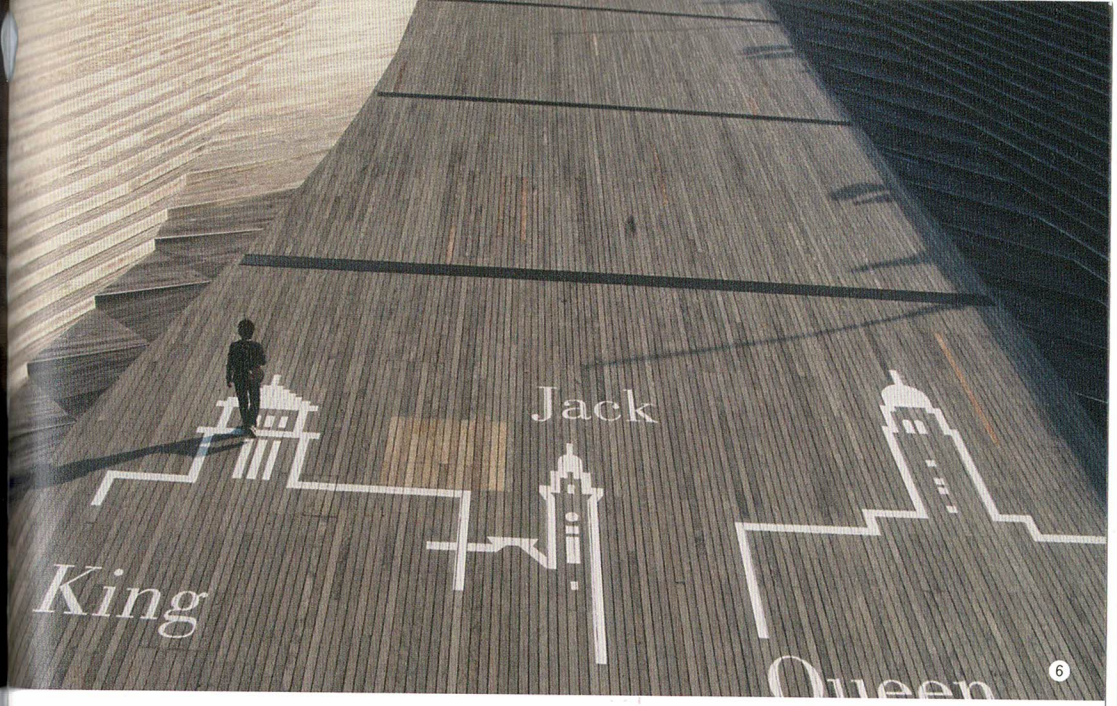


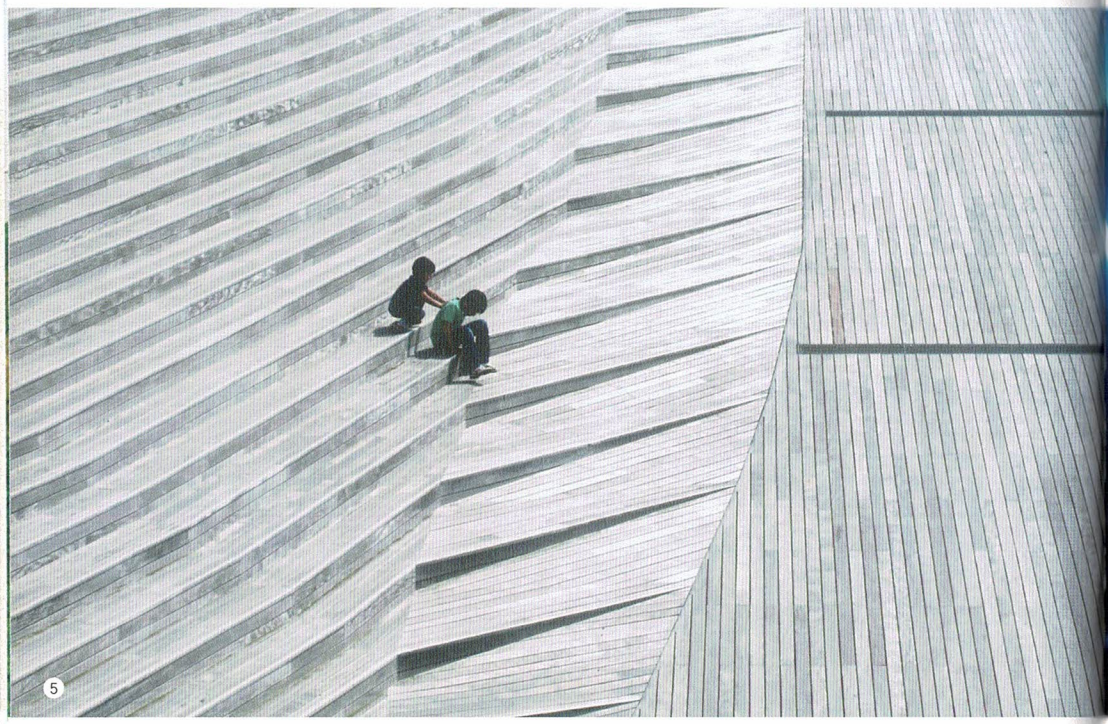
51～55頁：foa「横浜港大さん橋国際客船ターミナル」2002年
学生による「フォトコンテスト」の写真

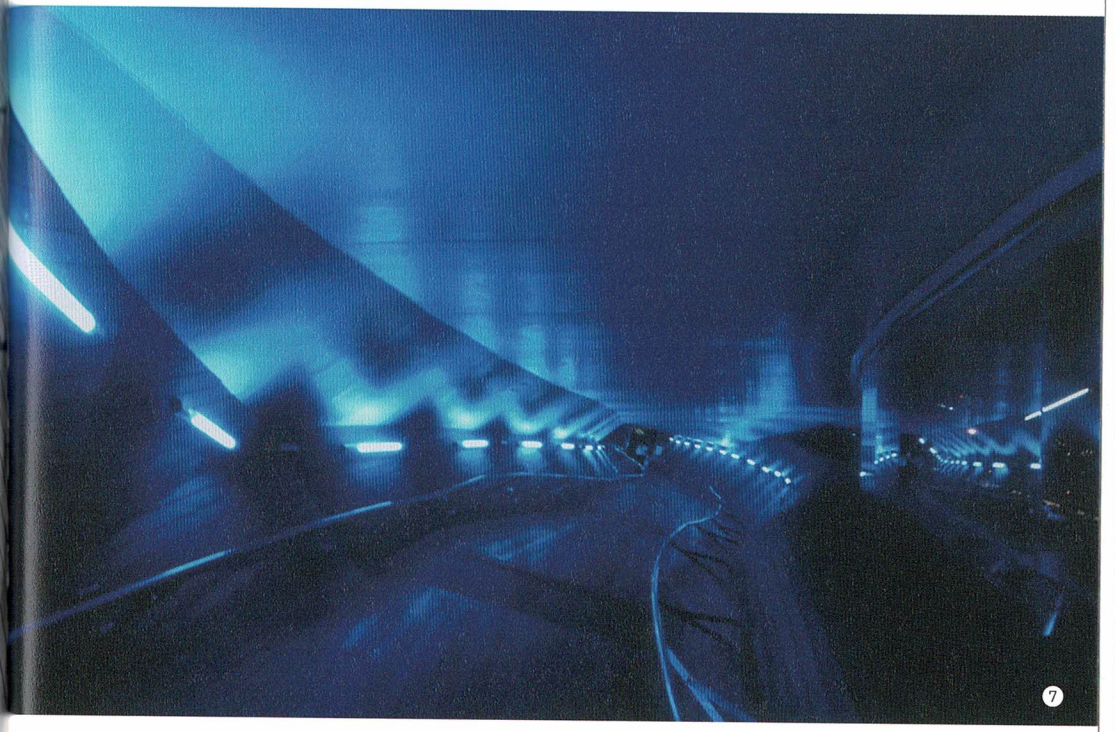


横浜の「大さん橋」は構図を押さえて撮るのが難しい建物なんだけど、①は水平線とその向こうに見えているものとの高さのバランスがいいんですよね。②を撮った人は、きっと大さん橋に行って本当に地形のようだと思ったんでしょう。向こうに建っているビルとの対比で、一番建築らしく見えないところを攻めている。

③は本当に楽しそう。もはやこうなると公園にしか見えないですね。言われなかったら大さん橋とは気づかない。色の印象がものすごく強く出ています。手前から奥へ人が歩いていく連続感もありますね。ここで取り上げた写真の中にも人が写っているものがあるけれど、大勢の人が入っているのはこの写真だけです。人の散らばり方が非常にいい。







④は技アリな１枚。多分、この建物の大きさが都市のスケールと対比し得るということを表現するために、あえてシルエットになるまで待って撮ったんでしょう。都市との奥行きが縮まりましたね。⑤は単なる情景描写にならずに、この建築の特性みたいなものとそこにいる人をすごくうまくとらえていますね。まわりを完全にトリミングしていて、静かな音みたいなものを感じる写真。⑥は⑤とだいたい同じところを撮っているんだけど、こちらのほうは余白感みたいなものをうまくつかまえていますね。⑦はすごくたくさんの光が映り込んでいるところまでよく撮れています。形じゃなくて光の反射によって、この建物のもっている独特のうねった形が表されている。